



「年賀状という小さな窓」

～離れていても、心はそばに——つながりを結ぶ年の瀬の習慣～

校 長 森角 由希子

年の瀬が近づくと、年賀状の準備が始まります。今年は 170 通ほどを送る予定です。最も多かった年には 250 通を超え、自分のクラスの生徒、部活動の仲間、以前勤務していた学校の教え子、同級生、職場の同僚、長期派遣研修先で出会った方々など、様々なご縁がつながっています。

毎年恒例の「間違い探し」イラスト入り年賀状は、業者をお願いして作成しており、例年ご好評をいただいています。絵柄を選ぶ時間も、私にとっては楽しみのひとつです。あて名印刷の後に添える一言コメントには、いつも頭を悩ませます。ひと言だけのつもりが、つい相手の顔を思い浮かべながら、近況や思いを綴ってしまうこともあります。年に一度のやり取りだからこそ、ささやかな言葉が思いがけないつながりを生むこともあります。

例えば、研修先で知り合った方が大学で教鞭をとるようになり、教職経験者として音楽研究のインタビュー協力を依頼されたことがありました。年賀状で交わしていた短い言葉が、音楽に携わる喜びを再発見する機会へとつながったのです。一方で、高校時代の音楽の先生とは卒業後も年賀状のやり取りを続けていました。前年の年賀状から、先生のご様子に少し気がかりなものを感じていたのですが、今年、同居されていた妹さんから先生のご逝去を知らせるお手紙が届き、言葉にできない思いが胸に込み上げました。

年賀状は、しばらくご無沙汰している方々に「元気になっています」と伝える、ささやかながら大切な機会です。相手のご負担を思うと迷いもありますが、私にとっては一年の節目に心を整え、つながりを確かめるひとときでもあります。

近年、「今年をもって年賀状を控えます」といったメッセージを目にすることが増えてきました。メールや SNS が主流となる今、手紙ならではの温もりを改めて感じる年の瀬です。今年は古いプリンターがとうとう寿命を迎え、パソコンも買い替えることになりました。古いソフトではデータの移行が難しく、一件ずつ手入力しながら、少しずつ準備を進めています。

年末の慌たしさを言い訳に、「ゆく年くる年」や「ジルベスターコンサート」を横目に年賀状を書く日々も、そろそろ卒業したいと思いつつ……やはり、筆をとると、顔が浮かび、言葉を選びながら、心が温かくなるのを感じます。

今年も、たくさんの出会いと支えに恵まれた一年でした。日々の学校生活の中で、子どもたちの成長に触れ、仲間と語り合い、時には悩みながらも歩んできた日々に、心から感謝しています。どうか皆さまにとって、新しい年が健やかで穏やかな一年となりますように。来る年もまた、笑顔と温もりに満ちた日々とともに紡いでいけますように。本年も、本当にありがとうございました。

